

要 旨

本研究では、よりよい人間関係を築くことに関する道徳的価値の自覚を深めさせることが、豊かな人間性を育成することにつながると考えた。ねらいとする道徳的価値に関わる生徒の姿を体験活動から見取り、それを生かした自作資料を作成することで、生徒の資料への実感が高まるようにした。また、体験活動を振り返るための補助発問を設定することで、資料と体験活動をつなげるようにした。このような手立てを取った道徳の時間を通して、生徒は実感をもって体験活動を振り返り、互いに支え合う気持ちに高まりが見られるようになった。

<キーワード> ①体験活動を生かす ②自作資料 ③補助発問

1 研究の目標

よりよい人間関係を築くことに関する道徳的価値の自覚を深めさせるために、体験活動と関わらせた道徳の時間において、自作資料を効果的に活用した授業の在り方について探る。

2 目標設定の趣旨

平成20年3月に示された学習指導要領の道徳の目標では、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする」¹⁾とある。これに基づき、道徳教育は、各教科、総合的な学習の時間、特別活動などとの関連を図りながら学習指導を進めていかなければならない。そして、中学校学習指導要領解説道徳編では、「道徳の時間が道徳的価値の自覚を深める要となるよう工夫する」²⁾とあり、体験活動を生かしたり、他の教育活動との関連を図ったりするなど、道徳の時間における学習指導の工夫が必要になってきており、とりわけ体験活動を生かした道徳学習の展開が強く求められている。

このように、他領域との関連を図った道徳教育を行うに当たり、体験活動を生かした道徳の時間を工夫することの必要性があることが分かる。しかし、体験活動で得た実感は、それが終了してしまえば生徒の心から次第に薄れていきがちである。また、体験活動を行うだけでは、生徒が他者との関わりを意識することはあっても、道徳的価値を自覚することは難しい。このような場合、道徳の時間に体験活動を振り返るには、副読本などで類似の体験を扱った資料を活用するのが一般的である。しかし、体験活動の中で起きた出来事やその時に感じた気持ちなどを織り交ぜながら、写真やビデオ、読み物などの資料を自作すれば、資料の内容をより生徒の実態に近付けることができる。そして、それを効果的に活用して道徳の時間に再度振り返らせれば、生徒が自分の体験としてより実感をもって資料を読み進め、ねらいとする道徳的価値に気付くことができると考えた。さらに、ねらいに迫るため、生徒の様々な体験を引き出す手立てを取ることで、道徳的価値の自覚が深まる生徒を増やすことができると思われる。そのことが、グループの研究課題である他者との関わりを豊かにしていくことにつながると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

体験活動と関わらせた道徳の時間において、自作資料を作成し、その提示の仕方や補助発問などを効果的に授業の展開に仕組めば、生徒は実感をもって体験活動を振り返り、互いに支え合う気持ちや行動を強く意識することで、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めることができるだろう。

4 研究方法

- (1) 体験活動と関わらせた道徳の時間や自作資料の作成に関する理論研究
- (2) 体験活動から取材した自作資料と指導案の作成
- (3) 所属校での授業実践及び検証

5 研究内容

- (1) 先行研究や文献等を基に、体験活動と関わらせた道徳の時間や自作資料の作成における有効な手立てを明らかにする。
- (2) 体験活動前後における生徒の実態を調査し、その結果と理論研究を踏まえて自作資料と指導案を作成する。
- (3) 所属校1年生において体験活動「文化祭」及び「フラワー大作戦」と関わらせた授業実践(各1時間)を行い、仮説を検証する。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

中学校学習指導要領では、道徳の時間の指導に当たって配慮する事項として、「職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」³⁾とある。道徳の時間と体験活動と関わらせると、生徒はねらいとする道徳的価値を自分との関わりで捉え、自分自身と結び付けながら考えることになるため、実感が高まり、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めることができる。

そこで、体験活動と道徳の時間をどのように関わらせるかについて、中学校学習指導要領解説道徳編には、体験を生かすなどの学習指導の構想について「道徳の時間においては、生徒が日常の体験を想起する問いかけをしたり、また体験したことの実感を深めやすい資料を生かしたりすることが考えられる」⁴⁾と記されている。

横山は、体験活動等を生かした道徳教育を構想するために、「振り返ることがなければ体験での学びは自分の成長につながらない。道徳の時間というのは、この『振り返り』の場でもある」⁵⁾と述べている。また、道徳教育推進指導資料には、「体験を生かした道徳の授業とは、生徒が自分の体験を想起しながら自分の考えを深めることができる授業である」⁶⁾とし、その手立ての1つに体験の資料化を挙げている。

以上のことから、体験活動と関わらせた道徳の時間において、自作資料で実感をもたせ、補助発問で自分の体験を振り返らせることで、ねらいとする道徳的価値の自覚が深まり、ひいては研究課題である他者との関わりを豊かにすることができると思われる。

- (2) 研究の全体構想

本研究では、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めていく過程を図1のように構想した。体験活動に取り組んでいる生徒の実態から、特にねらいとする道徳的価値に関わる生徒の実態を見取るための視点と手立てを設定する。そして、見取った生徒の実態から自作資料を作成し、資料への実感を高められるよう

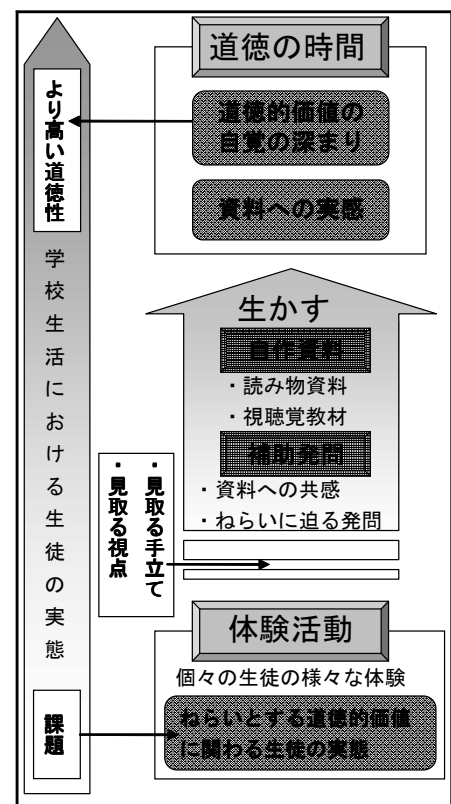


図1 全体構想図

にする。また、体験活動を振り返るための補助発問を設定し、生徒の体験を引き出すことで、生徒の道徳的価値の自覚を深める手立てとする。これらを通して、生徒はより高い道徳性をもつことができ、学校生活においてよりよい人間関係を築くことができると考える。

(3) 手立てについて

ア 体験活動を基にした自作資料の作成

資料への実感を高めるため、体験活動から見取った生徒の実態を基に文章化し、読み物資料を作成した。作成の手順を図2に示す。具体的には、①体験活動から見取った具体的な場面を設定する、②構成を、例えば「主人公の変容前」、「主人公の変容のきっかけとなる出来事」、「主人公の変容後」のように立て、あらすじを作る、③あらすじに沿いながら、体験活動から見取った生徒の実態を登場人物に置き換えて文章化していく、④それぞれの場面から発問を考える、⑤ストーリーと照らし合わせながら発問を吟味し、必要に応じて文章を修正していく、という内容である。

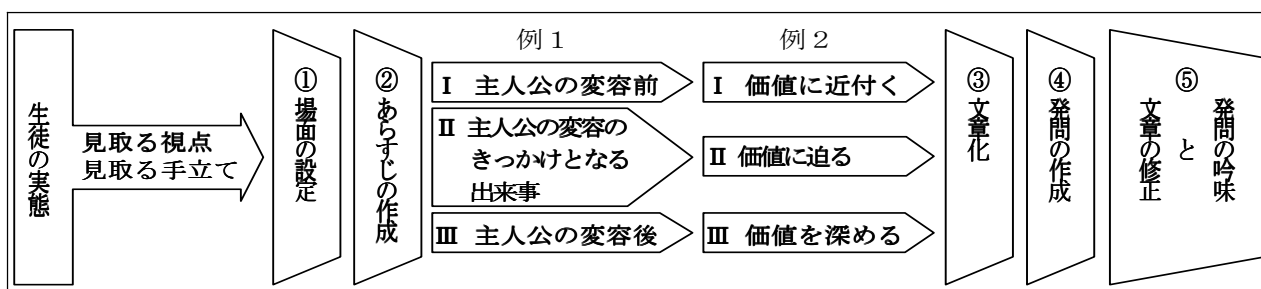


図2 自作資料作成の手順

イ 資料と体験活動をつなぐ補助発問の設定

体験活動を基にした自作資料を活用するに当たり、体験活動を振り返るための補助発問を、表1のように構成した。

まず、資料の登場人物に共感させるための補助発問A、次に、ねらいとする道徳的価値に気付かせるための補助発問B、最後に、体験活動を振り返るための補助発問Cである。

表1 補助発問の意図と具体例

区分	補助発問の意図	具体例
A	資料の登場人物に共感させる	・「あなたが主人公の立場なら、どういう気持ちになりますか。」 ・「あなたは～したことがありますか。」
B	ねらいとする道徳的価値に気付かせる	・「主人公は、どんなことに気付いたのだろう。」 ・「主人公は、なぜそう考えたのだろう。」 ・「どんな言葉や行為から、そのように感じましたか。」 ・切り返しの発問
C	体験活動を振り返る	・「主人公のように～した経験はありませんか。」 ・「～したとき、どんな気持ちになりますか。」

資料と体験活動をつなぐためには、補助発問Aで資料の登場人物に共感させ、資料に対する実感を高めておくことが大切である。また、補助発問BとCをつなげることで、ねらいとする道徳的価値は体験活動を振り返る視点となり、道徳的価値を自分自身の体験に重ね、自己との関わりで道徳的価値を捉えることができる。このような手立てを通して、自らの体験活動を振り返る中で、道徳的価値を自分のものとして受け止め、その自覚が深まっていくと考えた。

(4) 授業の実践と考察

先に述べた手立ての有効性を確かめるために、2時間の検証授業を行った。11月に実践したものを検証授業①、1月に実践したものを検証授業②とする。検証の視点は、表2に示す2点である。また、それぞれの授業の概要は、次頁表3に示している。

表2 検証の視点

検証の視点Ⅰ	体験活動と関連させた自作資料の活用による実感の高まり
検証の視点Ⅱ	道徳的価値の自覚を促すための補助発問の設定による道徳的価値の自覚の深まり

表3 検証授業の概要

	体験活動	内容項目	主題	資料名
検証授業①	文化祭	4-(4)	集団の中での協力	僕は照明係(自作)
検証授業②	フラワー大作戦	2-(2)	温かい心	5時間目のチャイム(自作)

ア 手立ての実際

(7) 検証授業①における自作資料の作成

体験活動「文化祭」の取組における生徒の実態を見取る手立てとして、「1週間を振り返って」という事前アンケートを実施した。そして、見取る視点(図3)により、事前アンケートの記述から生徒の実態を見取った。その中に、「道具を予定より早く完成させ、背景画を手伝うことができた(資料1)」などの記述があり、学年劇の準備中に生徒の協力する姿を見取ることができた。そこで、自作資料作成の手順①場面の設定として、劇の背景画作りの場面を資料に活かすことにした。

手順②あらすじの作成においては、まず、文化祭の準備中に教師の観察によって見取った学級における生徒の改善したい行動を、主人公の行動に重ねることで、主人公の変容前の姿を描くことにした。次に、主人公の心の揺れを内容として取り上げるために、主人公に影響を与える存在として登場人物に「友人」を加えた。最後に、主人公の変容した姿として、ねらいに迫る行動を描くことにした。

手順③文章化では、あらすじに従い、生徒の日常の状況も考慮しながら、背景画作りに取り組む様子を具体的に描くことで、文章にしていた。その際、手順④発問の作成も同時に行った。文章の文言から発問を考えたり、発問の内容を基に文章化したりするなど、文章と発問の内容とを交互に見比べながら作業を進めた(図4)。

手順⑤発問の吟味と文章の修正では、作成した文章と発問を全体的に見て、不要な部分を削除したり、分かりにくいところを加筆修正したりした。

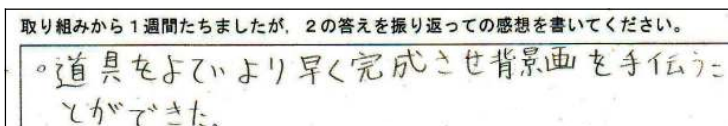
(4) 検証授業①の実際と考察

完成した資料と発問を基に補助発問を設定し、指導案を作成した(次頁資料2)。

授業では、補助発問Aとして「もし、あなたが僕の立場なら、どういう気持ちになりますか」と発問した。それに対して、「うるさい」や「めんどくさい」などと答え、聞こえないふりをしている主人公の心情に共感することができていた。補助発問Bとしては、「僕は、どんなことに気付いたのだろう」と発問して、「協力」という言葉を引き出す予定だった。しかし、授業では既にその言葉を生徒が発言していたので、より具体的に考えさせたいという意図で、「協力するとは、どうすることだろう」と、発問を切り替えた。生徒からは、「手伝う」「誘う」などの反応が見られた。その後に、補助発問Cとして「僕や裕太のように文化祭で互いに協力し合った経験はありませんか」と発問した。事前のアンケートで、そのような経験を書いていた数名の生徒が挙手し

- ・文化祭への意気込み
- ・学級のために自分の役割をやり遂げようと頑張った経験
- ・練習や本番で友達・家族・先生と協力し合った経験
- ・練習や準備、本番で辛いことがあったとき、励ましたり励ましてもらったりした経験
- ・友達が誰かを励ましたり、誰かに協力したりしている場面を見かけた経験

図3 検証授業①における見取る視点



資料1 事前アンケートでの生徒の記述

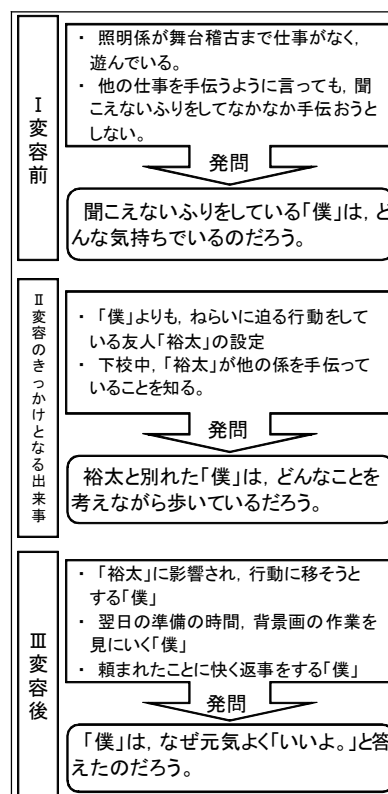


図4 検証授業①における文章化と発問の作成の概略

過程	学習活動	主な発問 予想される生徒の反応	指導上の留意点	検証
			体験活動との関連のさせ方・期待される生徒の姿	
展 開	2. 資料について話し合う。 (資料前半) (1) 呼びかけられても協力しようとしていない「僕」の気持ちを考える。 補助発問B	○ 聞こえないふりをして いる「僕」は、どんな気持ち でいるのだろう。 ・面倒くさいなあ。 ・どうして僕たちに頼んだよ。 ・行ってもいいけど、一人では行き たくない。	・ 資料は分割して配付する。 ・ 補助発問「もし、あなたが僕の立場なら、どうい う気持ちになりますか。」と問うことで、誰で も同じような気持ちを抱くことがあることに 共感させる。 「僕」の自己中心的な気持ちに気付いている。 補助発問A	検証 番号 Ⅱ
	(資料後半) (3) 呼びかけに応じ、背景画の制作 に協力している 「僕」の気持ちを 考える。 補助発問C	◎ 小筆を手にとった「僕」 は、どんな思いで作業を 始めているだろう。 ・僕も手伝うぞ。 ・早く完成するといいな。 ・みんな頑張ってたんだな。 ・自分の仕事でなくても、こう やって協力できるんだな。	自分から協力しようとしている「僕」の気 持ちの変容に気付いている。 補助発問「『僕』はどんなことに気付いた のだろう。」と問うことで、考えを深め、ね らいに迫らせる。 裕太や「僕」のように文化祭で互いに協力 し合った体験がないか生徒に問う。また、文 化祭後の感想からも紹介し、その行為の素晴 らしさを伝える。	検証 番号 Ⅱ 検証 番号 Ⅰ・ Ⅱ

資料2 検証授業①の指導案より抜粋

て、そのうちの一人が「背景を描くのを手伝った」ということを発表した。体験活動で自分が体験したと資料がつながり、実感をもたせることができたのだと考える。

ワークシートの記述では、「考えてみたら、いろんな人に手伝ってもらっているなあと思った」と書いている生徒がいて、文化祭と関わらせた道徳の時間を通して、文化祭だけでは自覚できなかった道徳的価値を自覚できたと考える。

(ウ) 検証授業②における自作資料の作成

「フラワー大作戦」とは、地域の方々に学校まで来ていただき、一緒にプランターなどに花苗を植える行事で、地域のお年寄りの方との交流を通して、誰に対しても思いやりの気持ちで接する態度を育てることをねらいとしている。

「フラワー大作戦」の終了後、生徒に活動の感想を書かせ、その記述内容から見取る視点を基に生徒の実態を見取った(表4)。資料3のような体験を書いた生徒は26名中5名で、作業を通しての生徒と地域の方との交流が少なく、生徒が自ら地域の方と触れ合っている意欲や態度についても、消極的であることが考えられる。

ただ、感想からは見取れなかったが、当日の教師の観察においては、地域の方の手助けをしている生徒もいて、ねらいに迫る行動をする姿も見受けられた。しかし、全体的に見ると、地域の方に言われたことに真面目に取り組む姿が見られる一方、やや受け身の姿勢であり、地域の方と積極的に交流しようとする生徒は少なく感じた。そこで、人に対して温かい心で接していこうとする態度について道徳的価値の自覚を深めさせられる資料を作りたいと考えた。

表4 検証授業②における見取る視点と生徒の実態

見取る視点	見取りの状況(生徒26人中)	
	小学生	地域の方
・小学生や地域の方と触れ合った経験	13人	5人
・小学生や地域の方から言葉をかけてもらったり、何かしてもらったりした経験	0人	5人
・小学生や地域の方に話しかけたり、手助けをしたりした経験	4人	0人

地域のかたがうえ方も
わかりやすくおしえてくれた。

資料3 「フラワー大作戦」後の生徒感想より

手順①場面の設定では、「フラワー大作戦」をそのまま取り上げるのではなく、地域の方が学校に訪れるという点で共通点のある行事「授業参観日」を取り上げた。さらに、資料を範例的な内容にすることで、ねらいとする道徳的価値を主人公に直接的に表現させ、どの生徒にとっても模範的な話になるようにした。具体的には、授業参観日に地域の方との触れ合いが期待される場面として、休み時間の移動教室の様子を取り上げた。

手順②③④については、概略を図5に示している。ねらいとする道徳的価値に「近づく」、「迫る」、価値の自覚を「深める」の3部構成で作成した。生徒のよい面を中心に、主人公と授業参観に訪れたおばあさんとのやり取りを描き、発問を作成した。

本授業では、ねらいとする道徳的価値に対する実践意欲と態度を育てるために、展開の後段で役割演技を取り入れることにした。この時間を確保するために、手順⑤発問の吟味と文章の修正では、最初の発問を削除することにした。範例的な内容であるため、価値に近づく段階にはあえて触れず、ねらいとする道徳的価値に迫った主人公の姿をしっかりと捉えさせることに重点を置いた。

(エ) 検証授業②の実際と考察

完成した資料と発問を基に補助発問を設定し、指導案を作成した(資料4)。

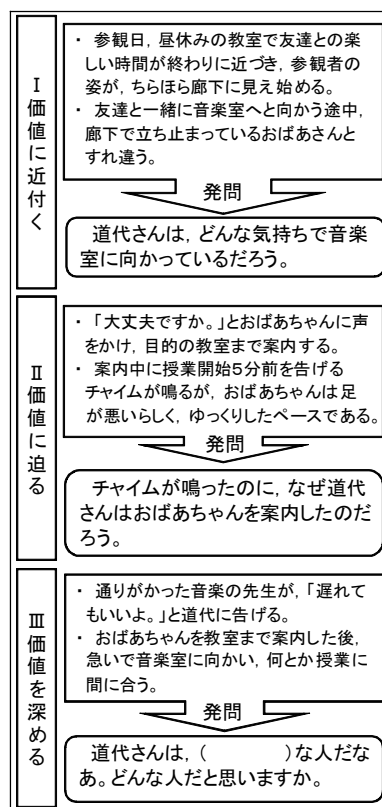


図5 検証授業②における文章化と発問の作成の概略

過程	学習活動	主な発問 予想される生徒の反応	指導上の留意点 体験活動との関連のさせ方「期待される生徒の姿」	検証
展開	2. 資料について考える。 (1) おばあちゃんに親切に接している道代の気持ちを考える。 補助発問B	○ チャイムが鳴ったのに、なぜ道代さんはおばあちゃんを案内したのだろう。 ・ 音楽室に行く途中だから。 ・ まだ手助けがあるから。 ・ おばあちゃんが困っているから。 ・ まだ迷うかもしれないから。	・ 生徒の反応に応じて切り返しの発問をし、おばあちゃんを心から気遣う道代の気持ちを捉えさせる。 ＜切り返しの発問例＞ 「逆方向の教室なら案内しないでしょうか。」 「ぎりぎりの時間なら案内しないでしょうか。」 道代の行為から、思いやりの気持ちを捉えている。	検証番号 II
	(3) 役割演技をし、感じたことを発表する。 補助発問B	○ 相手の言葉を聞いて、どんなことを感じましたか。 ＜地域の方のとき＞ 嬉しくなった。 ＜生徒のとき＞ 喜んでくれてよかった。	・ 何組か学級全体に演技を見せ、発問の答えを聞く。 ・ 補助発問「どんな言葉や行為から、そのように感じましたか。」 と具体的に問うことで、道徳的価値の自覚を深める手立てとする。 思いやりを感じる言葉や行為を、演者の演技から見取っている。	検証番号 II

資料4 検証授業②の指導案より抜粋

範例的な内容の資料の場合、登場人物に共感させるために「自分なら～」と問うと、ねらいとする道徳的価値から生徒の気持ちが離れてしまうことが考えられる。そこで、補助発問Aを削除し、補助発問Bとして切り返しの発問をすることで、ねらいとする道徳的価値に気付かせたいと考えた。授業では、次頁資料5のような生徒の反応が見られ、誰かに言われたからではなく自分自身の気遣いによって行動している主人公の姿に気付いたことがうかがえた。そして、主人公が声を掛けて相手を気遣

ったように、具体的な言葉や行為で表すことが大事であることに気付かせていった。

この授業では、資料と体験活動をつなぐ補助発問Cに代わるものとして、役割演技を学習活動に取り入れた。視聴覚補助資料を用いて「フラワー大作戦」の様子を具体的に思い起こさせ、地域の方との交流を再現させた。その上で、どのような気持ちになったかを振り返らせることで、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めることができると考えた。

役割演技を終えた生徒に、主発問として「相手の言葉を聞いて、どんなことを感じましたか」と問うたところ、地域の人の立場で演技した生徒は「うれしかった」、「優しい気持ちを感じた」、「積極的でいいなと感じた」などと答えた。そして、補助発問Bとして、「どんなところから感じたか」と問うと、「コミュニケーションが取れたところ」などと答えた。これらの学習活動により、言葉や行為で相手に気持ちを伝えようとする事のよさを自覚することができたと考える。

主発問	「チャイムが鳴ったのに、なぜ道代さんはおばあちゃんを案内したのだろう。」
生徒の反応	先生に挨拶をするように言われていたので、気に掛けないといけないと思っていたから。
補助発問B 切り返しの発問	先生に言われていなかったら、道代さんはおばあちゃんに声を掛けなかったでしょうか。
生徒の反応	いいえ(声を掛けたと思う)。

資料5 検証授業②に見る補助発問Bの実際

イ 体験活動と関わらせた自作資料の活用による実感の高まり(検証の視点I)

検証授業①における授業後のアンケートを基に、資料に描かれた内容を身近なものとして捉えられたかを検証した(図6)。「身近に感じた」「大体感じた」と答えた生徒が74%(20名)だった。さらに、資料6のような記述も見られ、大部分の生徒が自作資料の内容を身近に感じられたようである。また、検証授業②における授業前のアンケートでは、「資料について、自分の生活を振り返りながら考える」と答えた生徒が12%(3名)だった。それに対して、授業後のアンケートにおいて「今日の道徳の時間に読んだ資料については、どうでしたか」という問いでは、「考えることができた」と答えた生徒が、42%(11名)に増えていた(図7)。

身近に感じた	11人
大体感じた	9人
少し感じた	4人
あまり感じなかった	2人
無回答	1人

図6 検証授業①におけるアンケート結果(検証の視点I)

これらのことから、体験活動から見取った生徒の姿を自作資料に生かすことで、資料への実感が高まったと考える。

「僕は照明係はたぶん、私達の文化祭のときとほんどいがかいってました。それは最初は遊んだりしていた人がいたけど、最後にはみんなが協力できていたからです。」

資料6 検証授業①後の生徒の感想

ウ 補助発問の設定による道徳的価値の自覚の深まり(検証の視点II)

検証授業①における道徳的価値の自覚の深まりについて検証するために、感想の記述を考察した。文化祭後の感想では、「協力したい」等の感想は26%(7名)で、「セリフを覚えていたのでよかった」、「楽しかった」、「練習よりよかった」など、自分の役割への達成感のみを書いている

<授業前> 道徳の時間に読む資料について、今までの自分の生活を振り返りながら考えますか。		<授業後> 今日の道徳の時間に読んだ資料について、今までの自分の生活を振り返りながら考えることができましたか。	
考える	3人	考えることができた	11人
どちらかと言えば考える	14人	どちらかと言えばできた	12人
どちらかと言えば考えない	9人	どちらかと言えばできなかった	3人
考えない	0人	考えることができなかった	0人

図7 検証授業②におけるアンケート結果(検証の視点I)

生徒の方が多かった。それに対し、授業後は「自分の仕事が終わったら、他の仕事を手伝いたい」、「みんなで協力して、力を合わせたい」、「進んで協力したい」など、ねらいとする道徳的価値の自覚に関する感想を書く生徒が、81%(22名)に増加していた(次頁図8, 資料7)。

検証授業②では、「温かい心」を主題として取り上げた。そこで、温かい心が表れやすい場面を想定し、どのような気持ちになるかを選択肢から選ばせるという方法で、授業前と授業後、ともに同じ内容の調査した。アンケートの設問の内容は、「階段を上ろうとして、大きな荷物を持って上っているおば

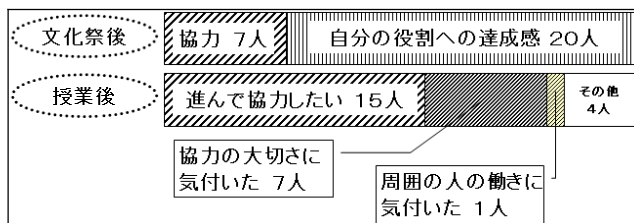


図8 検証授業①における感想の変容

〈文化祭後の感想〉

家でもしっかり練習し、セリフを覚えた。本番は緊張した。

〈授業後の感想〉

僕も、来年は自分の仕事が終わったら、他の仕事を手伝おうと思った。日常生活でもしっかり手伝ったり協力したりしたいと思った。

資料7 感想の変容の例

あさんがいたら、どんな気持ちになりますか」というもので、回答の選択肢を気持ちや行動の内容によって段階に分け、生徒の回答者数の推移から道徳的価値の自覚の深まりを見取った。その結果、授業前の回答に比べ、思いやりの気持ちが深い段階へ移行した生徒の増加が見られた(図9)。

階段を上ろうとして、大きな荷物を持って上っているおばあさんがいたら、どんな気持ちになりますか。(生徒数26名)

選択肢 (「温かい心」における道徳的価値の自覚を段階で示している。)	授業前	授業後
すぐに「荷物持ちましょうか?」と声をかける。	3人	11人
少し考えて「荷物持ちましょうか?」と声をかける。	11人	8人
何かあったら手が貸せるように、一緒くらいのペースで上ろう。	4人	2人
重そうだな。大変そうだな。	8人	5人
何も思わない。(そのまま横を通り過ぎる。)	0人	0人

図9 検証授業②におけるアンケート結果(検証の視点Ⅱ)

以上のことから、資料への実感を高めさせ、資料と体験活動をつなぐ補助発問の設定をしたことが、道徳的価値の自覚を深める手立てとして有効であったと考える。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

体験活動と関わらせた道徳の時間の在り方の研究を通して、次のようなことが明らかになった。

- ・ 体験活動から見取った生徒の実態を生かし自作資料を作成したことは、生徒自身の生活を振り返りやすくなり、生徒の資料への実感を高める上で有効であった。
- ・ 体験活動と関わらせた道徳の時間の展開段階において、補助発問を設定し体験活動を振り返らせたことは、資料と体験活動におけるねらいとする道徳的価値をつなげることになり、道徳的価値の自覚を深める上で有効であった。

(2) 今後の課題

本研究では、体験活動と関わらせた道徳の時間において、自作の読み物資料を主体とした授業の在り方を探ってきたため、活動の様子を撮影した写真や動画などについては補助資料として活用するにとどまった。今後は、これらの視聴覚資料や、保護者や地域の方からの手紙などを活用した資料を主体として、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めていくことができる指導の在り方についても研究を深めていきたい。

《引用文献》

- 1)3) 文部科学省 『中学校学習指導要領』 平成20年3月 東山書房 p.112, 114
- 2)4) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説道徳編』 平成20年9月 日本文教出版 p.83, 91
- 5) 横山 利弘 『道徳教育, 画餅からの脱却』 2007年7月 暁教育図書 p.173
- 6) 文部科学省 『道徳教育推進指導資料 中学校 心に響き, 共に未来を拓く道徳教育の展開』 2002年11月 財務省印刷局 p.30

《参考文献》

- ・ 廣瀬 久著 『道徳的価値の自覚を深める発問の工夫』 1999年4月 明治図書